
ゼロ×チート

No i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ×チート

【Nコード】

N8156R

【作者名】

No i

【あらすじ】

この話は魔法の使えないことを隠しながらも困難に立ち向かう主人公とそれをチート転生者であることを隠しながらも助けるオリ主が困難に立ち向かうそんな学園ラブコメディー

MP1・遅れた時は素直に謝った方がいい(前書き)

はじめましてNo.1です。

作者はガツチガツチの理系ですので文才は無いものとして考えてください(笑)

読むんじゃない、感じるんだよ!!!キリッ

それでは本編をどうぞ(・・・)

MP1・遅れた時は素直に謝った方がいい

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

読者の皆様読み初めて早々すまない。今の状況を説明したいのは山々なのだが・・・はつきり言って自分でも何が起きたかが分からない。

今俺は辺り一面真っ白の世界にいる。周りにはもの一つ無くそれどころか境界線すらわからない。まるで白い宇宙に浮いてるような感じだ。

最初こそは久々に見た夢がまさかこんな地味なものだと落ち込んだり、その後五感がはつきりすることに気がついて驚いたり、もしかしたら二次小説とかによくある転生とかいうヤツかなって喜んでたり、まさに一喜一憂していたんだが一向に何かが起こる気配がない。

しかも体は動かせないときたもんだ。さっきから助けを呼んではいるが返事が返って来る気配がまったくしない。

「俺にどうしろっていうんだよ・・・」

あれからしばらく経ったが変わりばいしない現状にさすがの俺でもイライラをせずにはいられない。

「あゝこりや夢じゃ無いことを認めざるおえないな。はあゝ・・・
・だがこんな場所に呼んでおきながらほったらかしにするとは・・・
・呼んだヤツはよほど死にたいようだな。くっくく」

と主人公が登場してすぐやられそうな悪役のような独り言を言っていると何も代わり映えのしなかった白の空間に異常が生じた。

(ん？やっとな来たみたいだな。さゝてどうやって殺ろうかな)

「はあはあ、す、すまんのお。途中でトイレに寄ったらすっかり忘れてしまったのお。ほっほっほ」

いかにも神様って感じのヤツが空間の裂け目から出てきながら言う。汗をかいてるところを見ると相当急いでいたのだろうか。

だがそんなことはどうでもいい。今はとりあえずこのイライラをど

うぶつけるか考えねば・・・

「・・・そうですか。とりあえず動けないんでどうにかしてもらえませんか？」

俺はなるべく落ち着いて言う。

「おっとそうじゃったのお。すまんすまんちよつとまっておれ。」
そう言っつて神様っぽいヤツはブツブツ言いだした。呪文かなんかだろつか？

「・・・よし！もう大丈夫じゃぞ。これでちゃんと動けるじゃろ。」

5

そう言っつたので試しに体を動かしてみるとさっきのが嘘のように自由自在に動かせるようになった。
これで勝つる！！！！

「どつじゃ？だいじょ死ねやこらああああっ！！！！」「ぶへらっ

「っふっ スツキリした。」

「い、いきなりなにをするんじゃ！？？」

神様っぽいヤツもといじじいが俺に詰め寄りながら言う。

「ちっ！！（結構な力入れたはずなんだがな）」

「まさかの舌打ちかのお！？」

「てめえがしようもない理由で遅れて来るからだ。」「そ、それはすまないと思ってるんじゃないかのお・・・」

「なんだ？言い訳があるなら聞いてやるうか。その代わり俺が納得できるよう10文字以内で言ってみろ。」

「それは流石にm「無理とは言わないよな？」「すみませんでしたっ！！」

「なるほど自分の非を認めるんだな？」

「・・・はい。」

「ならわかるってるよな？」ボキボキ

「えっいやさっきので終わったのじゃないのかのお、ちよっそれ以上はイヤアアアアアアアアアッ！！！」

「んでなんで俺がここに呼ばれた訳？」

あれからいろいろおど、コホン！いや O H A N A S H I したところどうやら予想通りここが神界で間違いないらしい。んで俺の前で土下座しているじじいがどうやら所謂神というもので間違いないらしい。

こんなヤツで世界が大丈夫かすごく心配だ。

「……いやのお。なんでかつと言うとじゃな。言いつらいんじゃないが………ワシがすっかり手をすべらせてしまったのじゃ。」

「手をすべらせた？どづいつことだ？」

「えっと詳しく言うんじゃな。ワシはいろんな世界を管理しててのお、ちよつどお前さんの世界の住人票を見返していた時に寝ぼけてついお前さんの名前のページを破ってしまつてじゃな……てへっ」「………はああああ！！！！？？？」

それつてつまり俺が呼ばれたのではなく、こんなヤツのつっかりで殺されたというのか！？

「納得できるかつ!!!」

「だからさっきから謝っとるじゃろ。」

「謝ってすむなら警察なんて要らねえーよ!!!」

それなんか古い「あん?」「い、いえなんでもありません。はい。

なんかへんな電波が届いたが、そんなことはどうでもいい。でもまさかそんなしょうもない理由で死ぬなんてな・・・まだやり残したこととか見終わってないのがあったのにな・・・アニメとかゲームとかマンガとかマンガとかマンガとか。

・・・いや考えるのはやめよう、死んでしまっただけからはもう遅いしな。

「ところで一ついいか?じじい。」

「神様だといっておるじゃろ。てかどうしたんじゃ?いきなり大人しくなっただけ。」

「いや、もう四の五のいっても生き返れないしな?それともできたりして!?!」

「いやおぬしの予想どおり無理なんじゃよ。一度外れてしまうと二度と同じ世界には存在できないのじゃ。こればかりはどうしようもなくてのお。」

「まっ、そっだよな。んじゃ俺はどうなるんだ?せめて天国には行

かせてくれよ？てか行かせる！！」

当然の権利だな！そっちの責任なんだからそれぐらいはやって貰わないと割に合わん！

「ん〜そうじゃのう。ん〜」

そういつてじじいは考え込んでしまった。

おいおいもしかして天国とか地獄とかって実際にはないのか？

なんて考えてるとじじいが戻ってきたようだ。

9

「天国に行く件は別に全然構わんのじゃが、そんなのでいいのかのお？」ニヤツ

「はあ？どういうことだ？」

じじいはなにを言ってるんだ？死んだならどちらかに行くもんじゃねえーのか？生き返せる訳でもあるまいし……いや待てよ、まさか……

その次の瞬間じじいの口から俺にとってもみない言葉が放たれる。

「異世界に行ってみる気はないかのお？」

「……この一言から俺の人生が変わった。」

MP1・遅れた時は素直に謝った方がいい(後書き)

すいませんすいませんすいません

ノリでこんな駄作を書いてすいません

反省はしている、でも後悔はしていない!!!

だからこんな駄作でも書き続けてやる!!!

いつか報われるはず!!!

ということで一話目でした。

ちなみにこの小説の更新は超不定期です。

ですが先程も言ったとおり書き続けるつもりなので温かい目で見守ってください。

ではでは!

MP2・別れとは一種の始まり（前書き）

懲りずにまた書いてきました。

自分でもまさかこんなすぐに二話目を書くはめになるとは……

取りあえず本編をどうぞ

MP2・別れとは一種の始まり

「な、なんだってー!!」

「なんじゃ？嫌なののお。んじややめ「いやいや待て待て!!」
なんじゃ？」

「異世界は大歓迎・・・じゃなくて!!さっきは戻すことはできないなこと言っただじゃねーか!!」

と俺が問い詰めるとじじいがニヤツと嫌にいい笑みをこちらに向けながら言った。

「確かに『同じ』世界に戻るは無理だとは言ったのお。」

「なっ！それじゃ・・・」

「ほっほっほ、別の世界なら可能ということじゃのお。」

「・・・マジで？ってことはまだ生きれるということか？
いや待てよ・・・」

「なあじじいそれはマンガの世界でも可能なのか？」

「お、別に可能じゃぞい。というかのお世界と言つのは莫大な数あるんじゃよ。おぬしの世界ではマンガでも実際にはどこかに存在してる世界なんじゃよ。」

へえーそうなんだ。

つてそうじゃねえ!!—ということとはマンガに介入ができるということか!!—

「あなたが神かつ!!—」

「だからそういつとるじゃろ!!—」

あーそういえばそうだったな。すっかり忘れてたよ……

そう考えてたのが顔に出たのかわからないが気付くとじじいは隅のほうでいじけていた。

なんていうかすげえーシユールだ。

「……どうせワシなんて……」

「あーもう!、すまねえなじじい。」

「それでも呼び方はじじいなんじゃのお!—?」

「いやだつて神様だと呼び辛いし？」

「はあ、もういいわい。しておぬしはどこか行きたいところはあるのかのお？」

「ん、そうだな・・・。」

はて？どうしようかな。まだ生きれるということか嬉しすぎて行く世界のことなんて考えてなかったな・・・原作を知ってる世界に行くのは決定として、どの世界に行くかだが・・・迷うな！。
あれもいいしなあ。いやあれも、まてよあれもあるじゃないか！！

~~~~~10分後~~~~~

「・・・まだかのお？」

「ちゅっと待ってくれ！！今二つまで絞ったから！！」

「あんまり遅いとそのまま天国に飛ばすぞい。」

「分かった分かった。……………よしっ！決まったぜ！！」

「ほお、でどこの世界じゃな？」

「エムゼロの世界で頼む。」

「そんな世界で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題無い！！って違う！！てかなんでこんなネタを知ってる！？」

「まあ社会勉強じゃよ。っとそうじゃなくてじゃな。それはどんな世界なんじゃ？」

「どんなと言われてもな……………」

「ふむ……………ならば少し失礼するぞい。」

そう言ってじじいは俺の頭に手を当てた。

「……………ほおなるほどのお。」

「何したんだじじい？」

「いやのお。おぬしの記憶からどんな作品が確認させて貰ったんじやよ。」

「……………そんなこともできるのか？便利だな。」

「神じゃからのお。これぐらいは余裕じゃな。さてワシはその世界の位置を探してくるかのぉ。ちよっとまっておれ。」

そう言っつてじじいは来た時に使った裂け目に入っつていった。

さてこの間どうすっかなー？

エムゼロの世界を選んだ一番の理由は安全だからだな。他の世界だとなにかと戦いがあるからな。正直そんな戦いには死んでも参加したくないな。

後は単純に完結したその後が知りたい！！原作ではいろいろな書かれてないからな。

てか待てよ？俺っつて魔法の才能とかあるのか？今の今まで考えてもなかったがそれがないと舞台となる聖凧高校に入学できねーじゃないか！？

せっかく行っつてもそれじゃあ意味ないぞ！？

そのときまたもや目の前に裂け目ができ中からじじいが出て来た。

「待たせたのぉ。だがちゃんとみつかったぞい！！」

「そ、そうか！・・・んでも俺っつて魔法の才能あるのか？」

考えても仕方ないからじじいに聞いてみた。神ならこれぐらいわかるよな？

「あゝそのことじゃが転生時にいろいろつけとくから安心せい。元  
はと言えばこっちのせいじゃからのお。バックアップは任せるがよ  
いぞい。」

「おーさっすがじい。分かってるな！ー！」

「・・・まあよい。んじゃそろそろその世界に飛ばすが構わんな。」

「おうー頼むぜー！」

「んじゃいくぞい。」

そう言うといきなり俺の足場から光が溢れだす。転移魔法の類いだ  
るっか？

「さてこれでさよならじゃのお。」

「ああそうだな。でも生きてる限りまた会うかも知れねえーだろ？」

「ほっほっほ、おぬしは面白いヤツじゃのお。次は本当に死んだ時  
かのお？」

「・・・そうだな。短い間だが楽しかったぜ？」

「ワシもじゃよ。さてもう時間が無さそうじゃな。」

そう、もはや俺の目の前は光でほとんどうめ尽くされてる。ほんと  
にもつそろそろだろっ。

「あーそうじゃ。魔法の才能等の特典はいろいろつけといたから向こうに着いたら確認してみるといいぞい。」

「ありがとうよ。じじい。」

「おー忘れとった。まだおぬしの名前を聞いて無かったのお？」

「ったくすっかりしてくれよ。」

倉敷零志　くらしきれいじ　だ。」

その言葉と同時に零志は光と共に消えた。

「……零志のお……いい名じゃ。さておぬしの二度目の人生はどうなるのかのお？今度はすぐにここに戻ってこないことを祈ってるかのお。ほっほっほ。」

そう言いながらこちらも裂け目へと消えていった。

今ここに零志の第二の人生が始まる。

## MP2・別れとは一種の始まり（後書き）

ということでも二話目です。

余りに暇で書きちゃいました。

おかげでかなり手抜き感がありますが、取りあえず早く原作に入っ  
て欲しい……

まあ何話が先の話でしょうが（^| ^;

ということでも次回からオリ主の少年期です。

ではでは。

## 設定（魔法・聖風編）（前書き）

少し遅くなりましたが設定です。

原作を知らない方もいると思うので覚えてる限りで基本的設定を書いておきました。

分かりづらいかもしれないところは本編でまた詳しく説明します。

では本編をどうぞ。

## 設定〱魔法・聖風編〱

このエムゼロの世界ではごくわずかな限られた空間で魔法が使える。

それはひとえに霊山などと言われるスポットであり、そのような場所では魔法磁場が形成され、その中にいる人は時間差こそはあるが、訓練次第で誰でも魔法を使えるようになるのだ。

ただし魔法の制御にはプレートと呼ばれるものが必要で、そのプレートに魔法を記憶・分かりやすく言えばインストールしなければならぬ。魔法の呪文は本来とてつもなく長いものであるのだが、一度インストールすることによってタイトルのみで発動することができる。

しかしそのプレートには容量が存在しているため、容量内では魔法を使えない。もちろん強い魔法ほど容量を食うわけだからインストールする魔法は考えなければならない。へたをすれば一回使っただけで容量をすべて持ってかれるからだ。まあよほどレベルの高い魔法じゃ無い限り気にすることじゃないのだが

またプレートにはランクがあり、もちろんランクの高いプレートほど容量が増える。これは魔法試験の成績や学校へ貢献した際に貰うポイントによってランクを上げられる。ほかにも特殊なプレートがあったりするのだがそれはまたの機会に

さて原作の舞台となる聖凧高校だがこの高校は聖凧山と呼ばれる霊山の上を経ており、日本でも数少ない魔法磁場の発生する場所である。

魔法秘匿のため高校の周りには結界が張られており、プレートが無いと入れないようになっている。

また高校内では魔法植物と呼ばれる魔法磁場でしか育たない特別な植物があり、マンドレイクなどがそれにあたる。

授業については普通授業と魔法授業の両方があり、部活についても普通のと魔法を使った魔法部とがある。

そして一、二年と三年の校舎は完全に分離されており、その間ではあまり交流がない。

その土地面積は広く山の上にあることもあって森や川、洞窟などがあるエリアもあったりする。

そのすべてが魔法磁場内であるので当然魔法の影響を受けて独自進化した部分もあり、魔法試験に使われたりするがほんとに危険なところには立ち入りを禁じてるエリアもある。

設定ㄥ魔法・聖風編ㄥ（後書き）

オリジナルの話なんて難しすぎるううう！！！

つてな感じで設定に逃げました。てへっ

間に合わせて書きましたので理解しづらいところが多いと思います

が・・・そのところは勘弁してくださいorz

文才が欲しいよお（TOT）

次回はいきなり飛んで中学辺りからだと思います。

ではでは！

MP3・十二年後・・・・・・・・えっ飛ばしすぎ？気にすんな。(前書き)

最近いろいろと忙しくなってきました。入学準備って面倒ですよー  
なので少しは更新ペース落ちるかも知れませんがorz  
さて今回の話ですがオリ設定多用してます。オリキャラも1名？で  
てます。

では本編をどうぞ！

『内は念話です。』

MP3・十二年後……えっ飛ばしすぎ？気にすんな。

「ふう〜肩凝ったー。さすがにロンドンから日本は遠いなー……」

皆様お久しぶりです。零志です。

じじいに転生させられてもう十二年が経ったわけですが……えっ飛ばしすぎ？気のせいだ。ってあれっ？なんかデジャビュ？  
まあそれはいいとして、さっき言ったので分かるようにいままでロンドンにいました。まあそっちでもいろいろあったわけですがそれはまた別の機会に話すとしよう。

『何言ってるのよ。飛行機の中でぐっすり寝てたじゃない。』

『……“シルフィー”……人がいるところでは話しかけるなって言ってるだろ？』

『別にいいじゃない。念話で話してるんだから。』

「はあ〜まあいいか、それにしても久しぶりだな日本。六年ぶりか……」

『確かに久しぶりね。』

『思えばあの時とは全く性格変わったよなーお前。』

『っ!?!い、いいのよあの時のことは忘れなさい!?!!』

『分かった!分かったから髪を引っ張るな!』

『わ、分かればいいのよ。』

と今ほつぺを膨らましてそつぽを向いてるのが俺のパートナーであるシルフィーだ。まあパートナーと言っても精霊なだけだな。大きさはちょうどルーシーぐらいで、いつも魔女みたいな出で立ちでいる。見た目だけみると水銀燈みたいな感じかな?

因みにこれが特典のひとつだったりする。なのでもう十二年もの付き合いになるんだよなこれが……。にしても随分丸くなったもんだ。昔はあんなにツンツンしてたのに……

『何してるのよ零志。早く行くわよ。』

「『はいはい。』んじゃ行きますか。」

移動中……

「・・・やっと着いたぜ。」

電車、バスを乗り継いでようやく辿り着いたのが程よい大きさの軒家である。

「にしてもまさか両親がこの家を残してたとはな。」

そうこの一軒家こそ俺の生まれた場所であり、ロンドンに行くまでの間住んでいた家である。

「てっきり売ってしまったものだと思ったのにな。」

『でも前から京子さんが零志は中学から日本で学ばせるっ言ってたよ。それで残してたんじゃない？』

「ふうん。そうだったんだ。知らなかったな。」

『そりゃそうよ。私もたまたま聞いたただけだから。』

「まあいつか。どちらにしろそのうち聖風に通うんならちよっどい  
いか。」

そう零志の家の場所はなんのおかげか原作の舞台となる聖風高校の

ある聖風山の麓にあるのだ。校門に繋がるゆるやかな坂道を10分も歩けば着くのである。

因みに恭子とは倉敷恭子（きょうこ）のことである。名前から分かるように零志の母親である。また魔法を使うものならば知らない人はいないらしいが実の子である零志ですらそのすべてを知らないらしい・・・実に謎に満ちた人である。

これもじじいが手をいれてくれたのかな？そういえば名前もつまりこと変わらなかったしな。感謝しとかないとな・・・

『・・・零志？』

「ん？あーごめんごめん。」

どうやら結構考えこんでたようだ。てかさっきからずっと家の前に突っ立っているしな。

「一休みしてから片付けをしないと。明日から忙しくなるし。」

『そういえば明日だっけ？入学式』

「そうなんだよなー近くの中学に行くから原作キャラの誰かに会わないかなってね。いやー実に楽しみだよ。」

子供のようにはしゃぐ零志からはとても前世合わせて三十歳には見えな

そんな零志を見てシルフィーは困ったかのように溜め息をついていた。

次の日

「んじゃ行ってきます。シルフィー留守番頼んだよ！」

『分かったわよ。いってらっしゃい。』

移動中

私立白桜<sup>いはく</sup>中学校

県内でも難関校への進学率の高い中学として有名だ。また近くに聖  
風高校があることにより入学してくる大半の生徒は聖風狙いである

ということが伺える。

「へえ、なかなかいいところだな。近いつてだけで選んだが結果オライだったな！」

零志はこんな風に言ってるが倍率が4倍以上ある白桜に入るのは至難の業なのだ。

いわゆるところのエリート中のエリートである。にもかかわらずこの中から聖凧に入れるのもまた一握りだ。それは聖凧が普通の話学校とは違う魔法学校であるところ関係する。言ってしまうえば生徒の選別方法が魔法力に関わって来るからだ。

さて話を元に戻そう。

すでに入学式は始まっており、今は校長先生の話中である。

「~~~~であるからにして~~~~以上で終わります。」

やっと終わったか。長すぎるんだよ。ったく、えーと次は・・・生徒会からか。ん？あの方は・・・

「それでは生徒会の代表は壇上へ」

教頭らしき人がさういうと男の先輩2人と女の先輩が1人壇上に上がる。

先頭で挨拶をしているのが生徒会長なんだが、零志はそれよりも後

の男女に目が行った。

あの子の2人は永井と沼田だったか？

あいつらここの中学だったのか・・・てか中学でもそんな役職やってたのかよ。

聖風では執行部に入ってるしな。

まあ原作に関わる人達だから仲良くしていかないとな！！

放課後

「ただいま」

『あー零志おかえりなさい。どうだった学校？』

「ん？まあ楽しくやっていけそうだよ。」

『そう、で誰か知ってる人はいたわけ？』

「そうだな。今の所何人かは知ってる人がいたな。」

あの子のクラスでホームルームがあったが、同じクラスには誰も知っ

てる人がいなかった。

これには零志も落胆するしかなかった。

でもまだ他のクラスにいるかもという期待でホームルームが終わるのを今か今かと待っていたのだが、運が悪く零志のクラスが終わるのが一番遅く、零志がクラスを見回る頃にはほとんど皆帰ってしまつて、結局分ならず終いなのである。

まあ時間はいくらでもあるしな。焦る必要もないだろ。そうと分かれば飯だな!!!

この男無駄にポジティブである!!!

「よし！シルフィーご飯にしようぜ！」

「ああ零志もうちよつとでできるから。」

「んじゃ手伝つよ。」

こうして零志の中学生生活1日目は終了したのである。

因みにその後食べ過ぎた零志は眠れない夜を過ごしたそうなの……

MP3・十二年後……えっ飛ばしすぎ？気にすんな。(後書き)

ん〜こんな感じでいいのでしょうか？

オリジナルは書き辛くてしかたない。

でもこれがもうしばらく続くと思うと……orz

さて今回飛ばしていた零志の子供時代の話ですが、一応番外編ということで本編の間に挟んでいくつもりです。

はたして零志はロンドンでなにをしていたのか!!! ―つ言えばイギリスが魔術・魔法大国といったところかな。

まあそれを書くのは先の話なので心に留めておく程度でいいかと

では今回はこの辺りで

さよなら、さよなら、さよなら。

## MP4・人生はゲームのようにセーブがきかない(前書き)

今回はかなりの難産でしたorz

・・・原作キャラの話し方がわからない!!

なんで結構想像で書いてます。

かなりキャラブレイクかもしれないね。

では本編をどうぞ!!

## MP4・人生はゲームのようにセーブがきかない

入学式からすでに一カ月が過ぎたある日のこと。

「ふう〜やっと学校が終わったぜ。」

まったく一回習ったことをもう一回習うのがこんなにも苦痛だとはな・・・

小さい時は英語を学んだり魔法を学んだりといろんな意味で暇を潰せてたが・・・はあ〜

そう言いながら廊下を歩いてると角を曲がったところで女の子とぶつかりそうになる。

零志は持ち前の運動能力でぎりぎりかわし、ぶつかりはしなかったが相手はびっくりしたように地面に尻餅をついている。

「いったーい、もお。」

「あーすまん！大丈夫か!？」

そう言って手を伸ばしてやると、そこには知っている顔があった。

・・・うわぁー、まさかこんなベタな出会いとなるとはな・・・

「あ、ありがとう！」

「いや、気にすんなよ。“百瀬”に非があるわけじゃないしな。」

そう目の前の娘の名前は百瀬晶ももはめぐり  
原作で主人公と同じクラスにいる才女だ。

なぜ俺が驚いてないかという入学式の翌日に構内をぶらぶらして  
際に見掛けてすでにいることを知っていたのだ。

そのお陰で初めてあったというのに変に動揺しなくてすんだのはよ  
かった。

……そう、それだけならよかった。その先のミスをしなけれ  
ば……

「えっ……私たちどっかで会ったことあったっけ？」

……そう、知っていたがためにうっかり名前を呼んでしまったの  
だ。

それぐらいならまだ取り返しがついたかもしれんが、ナチュラルに、  
それはもうあたかも知り合いのようにナチュラルに呼んでしまっ  
たのだ。

俺のバカ！！いくらなんでも気を抜きすぎだろ！！

てかどうすればいいだよ！なんて言えば切り抜かれるんだよコンチ  
クシヨウ！！！！

「ついや、その……あの……」

げっ！さっきからめっちゃ怪しい目で見られてるよ。くっ目線がキツいぜ

……仕方がねえ、もうこれ以上持ち堪えそうにねえし……ふう  
覚悟は決った！！零志逝きまーす！！！！

「じ、実は初めて見かけた時からすきでしたあ！！！！」

「……ふえ！？」

あまりに唐突な告白に百瀬は固まってしまった。

これしか思いつかなかったとはいえ、これはさすがに堪えるぜ……  
しかあし！！ここまできて引くわけにはいかないのだよ！！！！

「だから名前もその時に知って、だから俺と付き合ってくれっ……  
はあはあ」

さあこれで疑われないだろ！あとは百瀬が適当にフってくれれば……！

あまりに焦って息をたいぶ荒げていることも気付かず近付いて行く  
それに合わせて百瀬も段々と後ずさりしていく。

後から考えればただの変態があるいはストーカーに見えたのは仕方ないことかもしれない・・・

「・・・いや！来ないでっ！」バチン

「ぐほっ！」

もう我慢の限界だったのか、思いっきりビンタを食らった俺はあまりの衝撃に壁に吹っ飛ばされた。

「ふっミッションコンプリートだ・・・ぜ。」バタッ

走りさって行く足音を聞きながら俺の意識はそこで途切れた。

因みに五分後には回復したあたり零志らしい。

夜

・・・まじやったまったぜ。その場のノリとはいえあれは無かった

な・・・

確かに目的は果せたが何かを失った気がするぜ。  
これは完全に嫌われたよな・・・はあ〜

さっきもシルフィーにこの話をしたところ

『うっわ！サイテー！！あんたもつと他に方法がいろいろあるでし  
ようが！！だいたいねえあんたは〜〜〜』

と1時間近く説教されてしまった。今回は俺に100%の非がある  
ので俺も大人しくそれを聞き続けた。  
もちろん正座でだ。

『聞いてる？』

「・・・はい。」

『はあ〜取りあえずもう一度謝っておきなさい。分かった？』

「・・・はい。」

取りあえず明日謝るか・・・他の人ならまだこんなに考えなくても  
いいんだがな。

まあその場合は名前なんて知らないわけだからこんなことは起こら  
ないわけだが

そんなことを考える余裕は零志にはなかった。

百瀬 side

今日は特に変わりない一日になるはずだった。

それは放課後のことだ。

筆箱を教室に忘れたことに気がついた私は急いで学校に戻っていた。別に家にも筆記用具ぐらいはあるので特に必要はないのだが気付いてしまったからには仕方ないと思う。

もう皆ほとんど部活や家に帰ってるので学校内はほとんど人がいない。

そのため急いでいた私は階段を駆け上がり角を曲がろうとしたその時目の前に人が現れたのだ。あまりにびっくりした私は慌ててブレキをかけたせいか尻餅をついてしまった。

かなり痛かったが自分の不用心さに少しは腹が立つ！

「もお！」

「あーすまん！大丈夫か！？」

そう言っつて相手の男の子が手を差し延べてくれる。それには少し罪悪感を感じずにはいられなかった。

「あ、ありがとうー！」

そのせいか少しもってしまった。もお私ったらー！！

「いや、気にすんなよ。“百瀬”に非があるわけじゃないしな。」

それに対して私のせいだと反論しようかとした時私は少し違和感を感じた。

あれっ？今私の名前呼ばなかった？会ったことあったかな・・・

そして思わず聞き返してしまった。

それに対して相手は一瞬動揺したかのような反応をしたのち急に真面目な顔になり

「じ、実は初めて見かけた時から好きでしたあー！！！」

ええー！！！！えっつ、うそ今なんて言った！？・・・“好き”？・・・

・・・あー“好き”ね・・・って“好き”！！！！！！？？？？

あまりに急なことに私の思考は追いつかなかった。ちらつと相手の顔を見てみると一段と顔が熱くなったことが自分でも分かる。

それもそのはず零志の容姿はかなり整っており、街中を歩けば10人中全員とはいかないがほとんどが振り返るほどである。

まあ本人にその自覚はまったくないのだが・・・  
さて話を戻そう。

相手はその後もうろく言ってたみたいだが、固まっていた私はなにも覚えて無い。あまりの恥ずかしさにどうしていいのか分からず思わず私はだんだん後ずりだして・・・

そして耐え切れずあるうことが近付いてきたその相手をぶん殴ってしまった！

そのビンタは完全にクリティカルが決まったようで、男の子は壁に飛ばされてしまった。

あまりに申し訳なくなった私は走ってその場から逃げてしまった。

一時間後

私は今家に帰って来ている。

あの後気持ちを落ち着けた私は元の場所に戻ったのだが、既に相手はいなかった。

・・・やっぱり怒ってるよね。もう私のバカバカ!!!

そして今私はこのことを友達に相談している。

「ってことなんだけどどうしたらいいのかな。」

「どっつて言われてもね。・・・晶はどうしたいの?」

「そりゃ謝りたいに決まってるじゃない!! あんなことまでしちゃって許して貰えるか分からないけど・・・」

「聞いた限りじゃ印象最悪じゃないかしら。折角好意持たれてるのにね。」

「うっ・・・反省はしてるんだます・・・」

「んで思ったけど結局その相手って誰なの?」

「えっ? 誰って・・・あれっそういえば名前書いてなかったあああ  
!?!?!?」

まあーどうしてごうもバカなんだろ私・・・ううゝ

「・・・あんた普段はしっかりしてるのにね。変なところで抜けるよね。」

「ううゝそれは言わないで・・・」

「はあく取りあえず謝ることね。」

「やっぱりそう・・・だよな。」

「当たり前でしょ。」

「ううゝ分かった。今日はありがとう。またね。」

「はいはい。またね。頑張りな。」ガチャ

取りあえず次あったら謝ろう。他の話はまたその後考えよう！

よし！そうと決まれば寝るかな。うんそうしよう。

でもこの日彼女はそうなに簡単に眠らせてくれなかった。

「あああ！！宿題忘れてたあああああ！！???」

同時刻・零志side

「くっそおおお！まだ終わんねえええ！！??」

こちらと同じ理由で寝れなかったとかなんとか・・・

## MP4・人生はゲームのようにセーブがきかない(後書き)

原作キャラとの初絡みですね。

百瀬編は一話完結のつもりだったんですが思ったより長引きました。次回で終わるとは思います。

ではでは!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8156r/>

---

ゼロ×チート

2011年3月30日00時35分発行